

「ボツ『少年ジャンプ』伝説の編集長の“嫌われる”仕事術」

著者：鳥嶋和彦

出版：小学館集英社プロダクション

発行：2025年5月22日



2025年3月1日、稀代の漫画家である鳥山明氏が亡くなった。私が小学生の頃に少年ジャンプでデビューされて以来ずっと鳥山氏の漫画を読んできたように思う。そんな鳥山氏のご冥福を祈りつつ、氏の漫画に思いをはせていた頃に出版されたのが本書である。本書の著者である鳥嶋氏が鳥山氏を育てたことや、その後少年ジャンプの編集長になったことは有名だが、私の中の鳥嶋氏は鳥山氏の漫画の中に出てくる「ボツ」が口ぐせの鳥嶋氏のパロディーキャラのイメージしかなかった。だが、日本で一番売れている漫画雑誌である少年ジャンプの編集長にまでなった人の仕事術について書かれている本とあっては、何か私の仕事のヒントになるかもしれないと思い、手に取った。

鳥嶋氏は、大学卒業後に集英社に入社し、少年ジャンプの編集部の配属となった。編集者時代に鳥山氏をはじめ数々の漫画家を見出し育て、多くのヒット作を世に送り出した。その後、ゲーム雑誌Vジャンプを立ち上げて編集長となるも、3年後に少年ジャンプに戻り、編集長になった。さらに、集英社の漫画雑誌全般の編集長になり、常務取締役などを務めたあと、白泉社の社長、会長を歴任した。少年ジャンプの編集時代には、漫画家の発掘や漫画の掲載にとどまらず、漫画のアニメ化やゲーム化を進め、漫画のメディアミックス化に取り組んだ。編集長となった際には、少年ジャンプの人气が落ち、発行部数下がってきた頃であったが、初代編集長が打ち立てた3つの基本方針、つまり少年ジャンプの原点に立ち返るべく指示を出し、新しい漫画を次々とスタートさせ、少年ジャンプの立て直しに成功している。鳥嶋氏はこのようなキャリアから、漫画業界のメガヒットメーカーとして知られている。

本書は、対談形式で書かれており、鳥嶋氏の仕事との向き合い方や考え方、自身の仕事と会社の方針のバランス、他者との関係などを、漫画や漫画家、特に鳥山氏とのエピソードを中心に紹介している。本書は、3章で構成されている。第1章は「『ドラゴンボール』はどのようにして誕生したのですか?」とのタイトルで、漫画を読んだこともなかった鳥嶋氏が漫画雑誌の編集部に配属されてからの編集時代の仕事について、第2章は「『Dr.スランプ』のA

ニメ化は、なぜ失敗なのですか？」とのタイトルで、編集時代に鳥嶋氏が取り組んだメディアミックスについて、第3章では「『ONE PIECE』の連載に、なぜ反対したのですか？」とのタイトルで、編集長時代の仕事について書かれている。

本書は、私のような少年ジャンプの黄金期のドストライク世代には、珠玉のエピソードが多く紹介されており、鳥嶋氏の仕事術のことなどすっかり忘れて読みハマってしまう。また、インタビュー形式なので、鳥嶋氏の仕事術に関わる話もインタビュアーが深掘りしない限り流れてしまう。そんな文章をなんとかひも解いていくと、鳥嶋氏の人物像が垣間見えてきた。鳥嶋氏は会社に稀にいるタイプの仕事ができる人であろう。自分にも他人にも厳しいタイプで、仕事の合格ラインがそもそも高く、それは自分対しても他人に対しても変わらない。仕事に対する価値観が異なる人間とは一緒に仕事する時間も話し合う時間もお互いのためにならない、無駄であると考えておられるようだ。効率重視で目的のための最短ルートを邁進するが、そのための根回しも忘れない。冷たい性格のように見えるが、それは好き嫌いによるものではなく、むしろ他人をリスペクトしておられるからであろう。それゆえ、他人とは本音で接しておられるようだ。他人の性格や価値観、才能をリスペクトしておられるからこそ、切り捨てることも、ダメ出しすることも、良いアイデアが出るまで待つこともいとわない。鳥嶋氏とはそのような人物であるように思う。

本書はタイトルに仕事術と入っているものの、鳥嶋氏の仕事術について説明してくれる本ではない。鳥嶋氏が仕事の際に直面した数々の困難な意思決定において、どのような理由から何を排除して何を優先したのか、何を諦めて何を期待したのかをインタビューから読み取ることができる。すなわち、鳥嶋氏の仕事術を学ぶというよりは、仕事術を盗むための本といえるだろう。ビジネスパーソンは常に、意思決定や交渉において重要視すべき、つまり中心に据えるべきことは何かを、少なくとも自身の中で決めておかなければならない。そして、そのために必要なことはなにかを考え、準備しておく。必要であれば根回ししておき、交渉するのであれば交渉カードを準備し、その使う順番を決めておく。鳥嶋氏はこれをいつも基本姿勢として徹底されている。氏の優先順位をつける際の判断基準がかなり独特で、この部分が鳥嶋氏ならではの仕事術といえよう。鳥嶋氏の仕事術のすべてを取り入れることは人を選ぶが、鳥嶋氏の仕事ぶりはとても正論で、実は真正面から仕事に向き合っておられる。今回、本書を読んで、私の仕事への取り組み方を見直す良いきっかけとなった。

起業教育研究会 企画委員
大阪商業大学 准教授
北室 康一